

平成21年11月12日(木)
文化財課庶務・文化財
管理グループ
担当者 猿女専門員
内線 5634
直通 225-1841

## 石川県文化財保護審議会の審議結果について

1 本日（平成21年11月12日(木)）午前10時から開催された「石川県文化財保護審議会(会長 藤<sup>のりお</sup> 則雄)」において、石川県教育委員会から諮問された次の案件(2件)について、「保存する価値を有すると認め、石川県指定文化財に指定することが適当である。」旨の答申があった。

(1) 有形文化財（考古資料）〔1件〕

おきょうづかいせきしゆつどひん  
御経塚遺跡出土品

(2) 民俗文化財（無形民俗文化財）〔1件〕

かがとびほしごのぼ  
加賀鳶梯子登り

2 今回の答申案件については、今後開催される石川県教育委員会会議に付議され、議決が得られれば、県公報で告示し、正式に県指定文化財となる。

3 今回の答申案件（2件）を加えると、県指定有形文化財は226件（うち考古資料14件）、民俗文化財22件（うち無形民俗文化財18件）となり、県指定文化財の総数は336件となる。

# 御 経 塚 遺 跡 出 土 品

種 別	有形文化財（考古資料）
員 数	4, 219点
所 在 地	石川郡野々市町御経塚1丁目182番地 野々市町ふるさと歴史館
所 有 者	野々市町
概 要	

御経塚遺跡は、石川郡野々市町御経塚に所在する集落遺跡である。昭和31（1956）年以降、27次にわたる発掘調査が実施され、縄文時代後期中葉後半から晩期終末に営まれた集落については、南北約200メートル、東西約250メートルの範囲を中心域とし、多数の掘立柱建物、ほったてばしらたてもの たてあなたでもの 竪穴建物、いしがこいろ どきかんぼ 石囲炉、土器棺墓などが分布する長期定住集落であったことが判明しており、主要部は国史跡に指定されている。

御経塚遺跡出土品は、発掘調査で出土した縄文時代後期中葉後半から晩期終末にかけての土器、土製品、石器・石製品、骨角器、合計4,219点で構成される。

これらのうち、ふかばちがた あさばちがた 深鉢形・浅鉢形を中心とする土器は、当該期における東西日本の影響を受けつつも北陸地方の地域性豊かな特徴を有する土器変遷を連続的にたどれる代表的な資料である。この土器で認められる遠隔地に及ぶ交流は、石器・石製品の石材調査の結果でも明らかとなっている。

また、大量に出土した打製石斧、すりいし たたきいし くぼみいし 磨石・敲石・凹石は、根茎類の採集や木の実の加工など植物質の食料を重視した生業活動を反映するものである。さらに、みみかざり 土製耳飾、石製玉などの装身具や、どぐう ぎよぶつ 土偶、御物石器、せつかん 石冠、石棒、石剣、石刀などの祭祀具は、当該期の生活や精神文化を示す多種多様な内容を持ち、なかでも御物石器は全国で初めて建物と考えられる遺構内に据え置かれた状態で出土したものである。

このように、御経塚遺跡出土品は、本県における縄文時代後期から晩期の生活や生業、精神文化、地域間交流を具体的に示す重要な学術的資料であり、その文化財的価値は高く、県有形文化財に指定し、その保存を図ることが必要である。



御経塚遺跡出土品（土器）



御経塚遺跡出土品（石製品）

# か が とび はし ご のぼ 加 賀 鳶 梯 子 登 り

種 別	民俗文化財（無形民俗文化財）
所 在 地	金沢市地内
保護団体	加賀とびはしご登り保存会
時 期	正月の出初式、金沢百万石まつり
概 要	

加賀鳶は、享保年間（1716～1735）に加賀藩五代藩主前田綱紀により、これまであった江戸本郷の前田家上屋敷（現東京大学）の消防組織を、拡充強化した自衛消防隊が起源といわれている。

その加賀鳶による”梯子登り”は、当時、火災現場で使用された梯子にいち早く登り、高い所から風向きや周囲の状況を的確に把握して、消火活動の助けにしたことがはじまりであったと伝わっている。

明治2（1869）年に前田慶寧<sup>よしやす</sup>が金沢に加賀鳶を呼び寄せて、藩の火消役として配置させており、江戸文化の流れをくんでいる。現在では、金沢市第一消防団から第三消防団により昭和48（1973）年に結成した「加賀とびはしご登り保存会」が、威勢と気魄を信条とした大名火消の伝統的な技を伝えている。

明治以来、消防組から警防団・消防団へと技を伝えてきたが、昭和45（1970）年に技を統一し、現在では、指揮者・<sup>まとい</sup>纏持ち・演技者・梯子持ち・鳶口持ち・木遣隊により、加賀鳶木遣くずしを歌って始まる。

演技は、梯子の頂上から火事の状況や風向きなどを確認する「火の見」に始まり「敬礼」で終わる27種の技を1人がすべてを通して演技する。分団毎に、梯子持ちが高さ約6メートルの竹製の梯子を、長鳶口（長さ2.5メートル）、短鳶口（長さ1.3メートル）各4本の8人で支え、演技中はほかにもう1人が梯子を両手で支える。演技者は、法被・ぱっち・腹掛け・腕抜きをつけ、帯で結び、頭に手拭いを結ぶ服装で、梯子に登り、演技が決まったときには「はいー」と掛け声を発する。周辺の纏持ち及び鳶口持ちは、演技者の「はいー」に続き「やー、やー」と掛け声で応える。

このように「加賀とびはしご登り保存会」により、伝統的な技が伝承されており、演技に使用する梯子についても、地元の竹細工職人から教わった伝統的な技術により作製している。また、定期的な練習を行うとともに、子どもへの

伝承事業を開催するなど、伝統文化の保存と後継者の育成に努めている。

加賀鳶梯子登りは、「加賀とびはしご登り保存会」により、正月の出初式や金沢百万石まつりなどで公開されており、県民に最も親しまれている民俗芸能の一つである。

伝統的な技や保護団体のあり方は、地域的特色を示すもので民俗学的に貴重であり、無形民俗文化財に指定し、その保存を図ることが必要である。



加賀鳶梯子登り（金沢百万石まつり）